

注意の制御スタイルに文化が及ぼす影響—実験心理学的アプローチを用いて—

The Cultural Effect of the Control Style of Attention

— from Experimental Psychological Approach—

研究代表者 上田 祥行 (D1)

教員 齋木 潤

研究分担者 坂野 逸紀 (M1) 小宮 あすか (M2) 横尾 知子 (M2)

〔研究目的〕

注意の制御には2つのレベルが考えられる。視環境に対する視覚的注意など知覚における低次レベルの注意制御と、思考・推論における高次レベルの注意制御である。これまでの比較文化研究において、文化によって優勢な注意の制御スタイルが2つに大別されることが示された(Markus & Kitayama, 1991 など)。しかしながら、このような注意の制御スタイルにおける比較文化研究は、主に思考・推論が関わる高次レベルで行われており(Masuda & Nisbett, 2001; Chua, Boland, & Nisbett, 2005)、高次の思考・推論が伴わない基礎的な知覚・認知課題における注意の制御スタイルに文化が及ぼす影響に関して直接アプローチしている研究は現在のところ極めて少ない。

そこで本研究の目的は、これまでに実験心理学の分野で精錬されてきた高次の思考・推論を伴わない課題を用い、注意の制御スタイルに文化が与える影響を検討することである。

〔研究経過〕

実験1では、瞬時的物体認識課題を用いて、日本人とアメリカ人が課題遂行に注意を向ける情報の違いについて検討した。実験2では、4種類の視覚的注意に関する課題を用いて、文化が影響を与えていると考えられる情報処理について検討した。

実験1で用いた課題は瞬時的物体認識課題(Grill-Spector & Kanwisher, 2005)である。彼女らは瞬間的に呈示された物体中心画像の検出とカテゴリ同定を行った。その結果、検出とカテゴリ同定は同等のパフォーマンスでできることを示し、物体の検出ができたときにはカテゴリが同定されていると主張した。しかしながら、同様の実験を追試した坂野(2007)では、物体検出のパフォーマンスとカテゴリ同定のパフォーマンスには差が

あった。このことから本研究では、瞬間的に呈示された画像であっても、注意を向ける情報に差異があると考え、ヒトの視覚的特性から、その差異が特定の空間周波数帯域の違いにあると仮説を立てた。実験の結果、空間周波数帯域によって、日本人の物体検出とカテゴリ同定のパフォーマンスの差異が説明できることがわかった。

実験 2 で用いた課題は、4 種類の視覚的注意に関連する課題(視覚探索課題、線と枠課題、空間的注意課題)である。課題によって、文化的差異を生じさせる課題とそうでない課題がある。また、日本人であってもアメリカ人と同様の結果を示す協力者や、逆にアメリカ人であっても日本人と同様の結果を示す協力者がいる。更に、ある課題で日本人的な振る舞いをした協力者が他の課題においても、同様に日本人的な振る舞いをするかどうかは明らかではない。そこで、同一の協力者でこれらの 4 種類の課題を行い、協力者間の一貫性、また文化差を示す課題がある特定の注意と関連があるのかを検討した。その結果、これまでに文化差を示した研究は、如何に注意の大きさを課題に応じて制御するかという動的な注意と関連があることが示された。

〔研究成果〕

本研究では、2 つの実験を行い、思考・推論を伴わない低次レベルの注意の制御スタイルに文化が与える影響について検討した。これらの結果から本研究は 2 つの示唆が得られた。第一の示唆は、瞬時的物体認識課題のように非常に短い呈示時間であっても文化差が生じるということである。第二の示唆は、注意の大きさを制御する必要がある課題において文化差が生じるということである。

このことから、一度にどれだけの範囲に注意をあてられるか、という部分では文化による違いは見られないが、注意をあてる範囲を制御する場合、文化による違いが見られるということが示される。このような文化的差異が見られるとき、Ueda & Saiki(preparation)の結果から、これまで論じられてきた注意の制御スタイルとは逆の結果が引き起こされると考えられる。

本研究では研究分担者以外にも、陳蕾(聴講生)、嶺本和沙(M2)が研究に取り組み、実験計画、準備、結果、考察の面で非常に有意義な意見を述べてくれた。また、実際の実験の遂行も行った。本研究は 2 つの研究科、4 つの研究室をまたぐプロジェクトであった。それぞれの研究室の得意分野と専門領域を上手く補い合うことで、認知心理学と社会心理学を実験心理学という大きな枠組みのアプローチから再検討するという、これまで成し得なかったことが可能となった。この結果、個々の分野だけからでは得ることができなかったであろう成果を得ることができ、それぞれの分野に新たな知見と更なる課題を与えたことは、本研究の大きな意義であると考ええる。

なお本研究の成果は、本研究チーム主催のワークショップ及び第 72 回日本心理学会にて発表する予定である。